

チャペルへの招き 「愛する」人になるために

打 樋 啓 史

私の好きな本に、心理学者エーリッヒ・フロムの『愛するということ』（原題：The Art of Loving）があります。そのなかでフロムは、人が他者を本当に愛するためには、人格を成長させ、愛する能力を身につける必要がある、と論じます。つまり、愛とは単なる感情の問題ではなく、他者を真に愛するための技術（Art）があり、それを習得する学びや修練が大切だということです。興味深いのは、愛するためには集中力が必要であり、これを養うために、椅子にすわり、何もせずにただ自然に呼吸をすることを毎日朝晩20分ずつ続けるとよい、と勧めるくだりです。

ここでいう「愛する」とは、恋愛のことだけではなく、自分が会おう他者を、自分自身を、そしてこの世界を本当に大切にすることです。そのような意味で愛することのできる人になるためには、ただ一人でじっとしていられ、静かに自分の存在を感じとることが不可欠だ、ということです。このフロムの主張には説得力があります。散漫で、すぐ周りに左右されて、いつも何か／誰かに依存している限り、自立した人間として本当に他者や世界を愛することはできないからです。

今年で創立120年を迎える関西学院の長い歴史のなかで、多くのものが生まれ、なかにはその時々役割を終えて消えていったものもあります。しかし、学院草創時から今日までずっと変わらず存続してきたものが、チャペル・アワーです。そのように関西学院がチャペルを大切にしてきたのは、上に述べたことと関係があります。

皆さんは大学で様々なことを学んでいきますが、その目的は何でしょう。私は、「愛する」ために学ぶのだと思います。自分を、他者を、世界をかけがえのないものとして大切にし、そこから自分の生き方を形成していくということ。その学び全体のなかで、チャペル・アワーは、授業やクラブなどの活動から一歩離れて、「静かになって、自分の存在を感じとる時」なのです。こういうひとときがあってこそ、大学生活全体が「愛すること」に向かうものとして、活力と潤いを帯びてきます。皆さんの成長の過程で、チャペル・アワーが、心の最も深いところでの励まし、慰め、養いを与える、かけがえのない源泉となりますように。

（社会学部宗教主事）